
Dragon killer～龍を狩るもの

六畳六間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dragon killer 龍を狩るもの

【Nコード】

N2365R

【作者名】

六畳六間

【あらすじ】

世界が龍によって支配されているパラレルワールド。

主人公エリス（17）はかの有名な村田銃を作った村田Ⅱ通称親方や26歳の山本五十六など色々な人物と共に龍への戦いを挑む。

龍殺しの兵器part1 (前書き)

この小説の世界はパラレルワールドであり多数の時代錯誤や設定変更があります。あらかじめ理解した上でご覧になって下さい。

六畳六間

龍殺しの兵器 part 1

「お父さん…お母さん…熱いよ。助けてよ。ねえ、目を覚ましてよ。」

少女は燃え盛る火の中で泣きながら父と母の体を揺さぶる。少女には分かっていた。もう手遅れだということも、両親がどうしてこんな目にあっているのかも。

“ドラゴン” 全てを焼き、全てを奪う…それでいて決して消えることのない絶対的存在。少女もまた、その戦争に巻き込まれた“哀れな子供” というわけだ。もちろん少女が特別つらい思いをしているわけではない。みんなそうなのだ、軍人、女、男、子供、必要あらば飼い犬まで…例外なんて許されない。ドラゴンそういう生き物だ。人間と龍との関係は揺らぐことの無いものとされてきて、科学技術が進歩した今日でもそれは維持されている。剣も銃も通じぬ一種の悪魔のような存在だ。

何度も人間は戦いを挑んだ。しかしそれは単なる浪費にしかならなかった。沢山の兵士が死に、報復によって幾つもの町や村が滅んだ。この少女がいる村もまた龍の襲撃によって滅びようとしていた。

「エリス、一人はイヤだよお…さみしいよおねえ…」

少女、エリスは炎の中両親の亡骸にすがり泣いていた。直に意識が薄れていく…

その時、誰かが家のドアを破ったのが見えた気がした。でももうどうでもよかった。

十年後――東方の島国

「エリス、ちょっと手伝ってくれ」

町外れの小さな工場の作業場でひげを生やした大男が叫ぶ。

「はい、今いくー」

適当に返事をしながらエリスと呼ばれた少女は作業場へと降りる階段を駆け足で降りる。彼女は助かっていた。助けてくれたのが誰かは覚えていない。ただ助けた後難民船に乗せてくれたのは覚えている。そしてここ、日本帝国に着いたのだ。

ここは島国とあって龍の襲撃がまずない平和な国だった。

「親方あゝ何を手伝えばいいの？」

エリスは何年かぶりに仕事場に入れてもらった。別に入りたいわけではないがこう呼ばれると少しワクワクしてしまう。

「いや別に何かやられて訳ではねえんだがよ、ちよつとみてもらいてえもんがあんのよ」

「なにを？」と思いついていくエリス。

「へっへっへー驚いてくれよ？これが長年の成果だあ！！」

そう言って作業場の一番奥にあるシャッターを開ける親方。勢いよく開けられたシャッターの奥に何かが見えた。

「何これ？」

エリスは始めてみる機会に戸惑った。全く見たことがないからリアクションがとれない、それを見て親方が何か嬉しそうなのが腹立たしい。

「始めてみたか？そりやそうだろう。これは世界に一つしかない“龍殺し”のための兵器だぜ」

親方が自信満々に言うが世界初のせいではかと思べられないから凄さが伝わってこない。ただ親方は“龍殺し”と言った。その言葉がエリスの耳に残った。

時を同じくして日本帝国海軍司令部――

「長官！事は一刻を争います。ご決断を！！」

ヒゲを生やしたダンディーな海軍幹部が自分より若い長官に対して物凄い勢いで決断を迫っていた。

「とは言ってもねえ：龍がくるからしっぽを巻くってのもなあ」

やまもと いそく
海軍長官山本五十六は乗る気ではない。

「連合艦隊は？防衛戦に使えないのか？」

今更分かりきった質問を投げて時間を稼ぐ五十六。

「古龍相手に大砲が通じるわけ無いでしょう！」

幹部は呆れたように言う。実際通常の龍なら何とかならないでもないが今問題にされているのは“古龍”である数百年を生き、あらゆる物を焼き尽くす悪魔である。

通常の龍でも一匹しとめるのに一個艦隊が必要だが古龍では数を揃えても豆鉄砲の集まりだ。単純に火力不足なのだ。

「はあどっかに強い兵器とかないかな」

五十六は窓を見つめながら呟いた。

場面戻ってエリスのいる町工場。

「すごいたろう戦車ってやつだまあ軍が持つてる奴だがこの国じゃ民間人はまずお目にかからないだろう」

親方は口を開けてぽかんとしているエリスそっちのけで待ってましたとばかりに説明を始める。

「軍の主力は75？の砲しか積んでねえがあれじゃあ豆鉄砲同然よ。俺のはドーンと120？の大砲を積んである戦艦の奴よりでかいぞ」親方は自慢げに言う。120？の大砲ともなると相当な技術が必要だ。この世界のこの時代の技術では精々75？が限界といったところだ。軍艦も戦争やるより龍を何とかしたいということから陸軍の兵器に比べて大いに遅れをとっている。

「普通の龍くらいなら一撃だぞ一撃！！多分な…」多分と言われると信用度が下がるがそれだけ未知の領域なのだ。

「エリス、頼みがあるこの戦車に乗ってくれないか？」いきなりとんでもないことを頼まれた。

「は？え！？」

いきなりすぎて訳が分からず素っ頓狂な返事をするエリス。せめて前触れが欲しい発言だ。

「えーっと何で？」

とりあえず理由を問う。あんまりいい答えが返ってくる予感はないが…

「なんで？そりゃあお前この工場の社員だろ？」

「社員は戦車に乗るんですか！この工場では！！」

綺麗なツツコミだが親方には通じない。次の次の次ぐらいまでは返し言葉が用意されていることだろう。それを悟ったエリスはもう降伏しようと考えた。

「…もういいです。乗りますよ。で、戦車って何人乗りなんですか？」

「…4人」

「何でためらったんですか？今」

何かかくしてますよね？とエリスが言うのは目に見えていた。だから聞かれる前に答えてしまえとというのが親方のやり方だ。

「実は残りの3人が決まっとらん」

「そんなことだろうと思いました。で？どうするんですか？今から探しますか？」

「そう言ってくれると思っていた！よし、いくぞ！！」

親方はまたエリスの思考を読んだ。冗談は通用しない。ここにきて大事なルールを忘れていたエリスだった。

またまた場面変わって日本帝国海軍司令部――

「古龍の進路は一貫して変わらずここ、日本帝国に向かっています。」

ヒゲの幹部が報告に来た。電話でいいつつうのなんて言うとき色々面倒なので言わない。

「で？領海進入予定は？」

「早くて1ヶ月遅くても3ヶ月ほどできます。どうします？長官」

「連合艦隊の出撃命令を出す。足止めをしている間に少しでも多く民間人を助ける」

「…わかりました！」

そう言っただけで幹部は後ろを向いた。そのまま扉へと向かう。

「長官、ご決断に感謝します。我々も最善を尽くしますのでご安心ください。国民は私達が守りましょう」

出て行くさいに幹部はそう言った。

なんかこの部屋いつもより広いなあと感じた五十六だった。

「さて、久しぶりに町にでるか？」

上着を取り出し自分も扉へと向かう。

気がつくと町外れまで来てしまっていた。辺りは夕陽の光に染まっている。さすがに司令部を開けっ放しではまずいと感じて帰ろうと進路を変えたその時、大地が揺れた。

「地震：じゃない龍でもでたか？」

五十六は本気でそう思った。地響きにも似た振動は次第に近づいて来ている。だが、それに伴いエンジンの音も聞こえてきた。

「戦車：か？しかし聞いたことのないエンジン音だ……！！？」

路地から姿を現したそれはとてつもなく大きかった。そして大きな大砲：何をとっても日本帝国、いや例え龍との戦闘経験が豊富なアメリカですらこんな物は造れないだろう。

「マジ、かよ」

五十六が呟いたとき戦車のハッチが開いた。中から少女が出てくるって少女？

「ああ、すいません驚かしちゃって大丈夫ですか？」

「エリスどうした？民間人か？」

もう一人出てきた。ヒゲで目が鋭くて…ってこの人！

「あの…村田さんですか？村田銃の…」

「ん？お前、連合艦隊の山本か？」

五十六は伝説の男にばったりあった。

「親方、知り合いですか？」

「ん？ああこいつが軍に入りたてのころにちよつとな今は連合艦隊の長官だ」

「へーって長官！？こんな若いのに？」

確かに五十六は若い。若いが天才だ。そうでもなければ長官にはなれないが…

「村田さん！どうしてこんなところに！てっきり戦死したかと…」

「ああはいはい悪かった悪かったところで山本、頼みがある」

完全に流された上になんか要求された。

「戦車乗りを探しているんだが…お前しらねえか」

part 2 へ続く

龍殺しの兵器part1（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
感想、意見、要望待ってます。

龍殺しの兵器part2 (前書き)

新規登場人物

しりゅうかのん
子龍華音
ふかやまりゆうじ
深山龍児

どちらも17歳

龍殺しの兵器 part 2

「戦車乗り…ですか？」

五十六は戦車の迫力に圧倒されながらも何とか答えることができた。一応自分も軍人である。こんなことで腰を抜かしては古龍と戦うなんてことは出来ない…ん？ まてよ…

「そうだ！！その戦車があれば何とかなるかもしれない」

五十六気付いた。龍殺しの兵器を間近にみながらも気づけなかった自分が恥ずかしい。

「なんでえいきなり」

親方はいきなり叫んだ連合艦隊長官を変な目で見る。町外れで戦車を乗り回す人が変な目で見る人っていったいなんのだろうか…

「その戦車貸してただけませんか？」

五十六はダメもとで聞いてみた。

「ダメだ」

元のままだった。

「だが、乗組員をこっちで決めるなら話は別だ後3人足りねえさつきも言ったが心当たりねえか？」

「ポジションは？」

「装填、操縦、射手」

「車長は村田さんですか？」

「いや、エリスだほれこの子この子」

そう言って親方は先に出てきた少女を指差す。

「え！？しかし、みた感じではその…女性だし若すぎませんか？」

「お前がいえる立場か？それにこいつはな山本、おまえと同じで俺が見込んだ奴だ。心配ねえ！」

「村田さんが…」

五十六は改めて少女を見る。自分には分からないが村田さんはこの少女に何かを感じている…自分と同じような素質や能力を…………

「分かりました。乗組員はなんとかしましょう。しかし、エリスさんはどうなさいます？今から軍部で訓練を受けますか？」
五十六は2人に尋ねる。

「いや、こいつは俺が何とかする。あとこいつもな」
そう言って親方は自分の乗る戦車の車体を叩く。分厚い金属の板をたたく音がした。だが妙に音が響くが気になった。中が空洞なのだろうか？と思いつつもその場を後にする五十六だった。

さて工場に戻って親方（村田）とエリス。

「さて、中断はしたがとりあえず戦車の内部は覚えたな？」
親方が何事もなかったかのように聞く。

「はい、まあ一応一通りは」
たった数時間の乗車で内装を把握する。普通では不可能だ。だがそれができるのがエリスの能力。超記憶能力とでもいったところか：それを見抜いたのが親方：村田である。山本五十六と同じ天才であるということをする：

「次は戦術だが：一応一般的な戦車戦も学んどくか」
龍との戦いで普通の常識は通じない。だが親方はあえて一般的な戦車戦における戦術も学ばせることにした。これはそのほうが効率よかつ実戦に対応しやすいからだ。

「よし、俺の部屋からありったけの本を持ってこい！」
親方はエリスに命じる。

「分かりました。」
返事をするエリスはどこか楽しげだった。

場面変わって海軍司令部――

「戦車？戦艦で倒せない相手を戦車で倒せるとでもおっしゃるんですか？」

ヒゲの幹部が遂にいったまったかとはばかりに聞く。

「まあまあ、俺もいきなり信用しろと言うのも無理があるのは分かってる。でも俺はこの目で見た、それに事態は一刻を争うんだ早く手配してくれ」

最初に自分が言った言葉を今になって返された幹部。仕方なくわかりましたとつぶやく。防衛戦には賛成だが：戦車で龍、しかも古龍を倒そうなんて：

「ところで長官、戦車で海には入れませんが：その辺は――」

言いかけたその時目の前にいる長官殿は「忘れてた！」みたいな顔をしていた。

「はあ、どうするんです？諦めますか？」

呆れ顔の幹部。

「さて、10秒で考えるから」

――10秒後

「あ：いいこと思いついた。」

ひらめいた、10秒で：これが五十六の能力だったりするのだが：

「で、どうするんですか？教えていただけますね？」

まあ耳貸せやとばかりに人差し指を動かして幹部の顔を近づけさせる五十六。

漫画だったらごによごによ：とかひそひそなどと表現される会話を交わす。

「なんと！しかしそれでは兵器に失礼と言うものでは：」

「まあまあいいじゃないか一隻ぐらい、どのみち全部沈む予定だろ？」

サラッとひどいことを言う五十六。まあ間違っではないない。

「むむ：分かりましたではそちらのほうも手配しておきましょう。」

「よろしくね」

とりあえず用件を済ませた26歳の連合艦隊長官。しかし全ては始まったばかり、戦車を海に浮かせる方法はさておき戦車の乗組員が決まっていない。早急に探さなくては：

その頃連合艦隊旗艦、戦艦一若狭^{わかさ}一番砲塔内部――

演習での実弾射撃により硝煙の匂いや汗のにおいやらが充満する砲塔内部で射手と装填手が無駄話に興じていた。とは言っても殆どが上官に対する愚痴であるが：

「ったく、こんな可愛らしい大砲載つけて古龍と戦うなんざごめんだぜ長官殿は何考えてんだかな：なあ華音ちゃん？」

砲弾を磨きながら青年が隣にいる少女に言う。

「ちゃんはいらないよちゃんは、まあ私たちは軍人だしさ：仕方ないよね」華音は砲塔内を見渡す。中卒で軍に入ってもう自分は17歳になった。今までこの艦に乗っていることを誇りに思っていた。強い船だと思っていた。だが現実には自分が世間知らずなだけだった。戦意喪失を避けるために軍司令部は公にしないが日本帝国海軍の船はどれも古龍などの特殊な龍には勝てない。75？の砲ではいくら撃つても豆鉄砲：この世界の軍艦の主砲は多銃身機関砲のようなつくりだ、用は巨大なガトリング砲のようなものである。ただ仕組みは単純でリヴォルヴァー式銃のような仕組みだ。従って連射も中途半端になる。要は使えないのである。

「ねえ龍児：ここが私たちの棺桶になんのかな：？」

華音は龍児に問いかける。しかしどう答えるべきだろうか：格好いいことをうと例のフラグなので基本は流したい。

「棺桶にしちゃあでかすぎるもつと別の死に場所がほしいね」

龍児がそう言ったとき砲塔についているドアが開いた。

「お邪魔しまーす」

呑気な声で挨拶しながらずかずかと上がり込む青年。

「おい、なんだおまえこの期に及んで制服組はまた面倒なこと命令するつもりか？」

龍児は入ってきた青年にヤジを飛ばす。見たところ自分より階級はずっと上のようながどうせ戦死するんだから何を言ってもいいと考えた。

「命令しにきたのは正解かな。でも面倒かどうかは分からないし、もしかしたらこの船が棺桶にならずにすむかもよ？」

青年は笑いながら言う。一連の会話は聞かれていたらしいと気づく2人。

「で？命令って何です？ってかその前にあんたは何者だよ」

龍児は目の前にいる青年に問いかける。答えは直ぐに返ってきた。

「ああすまんすまん、俺は連合艦隊長官山本五十六だ。君たちに特殊任務についてもらうために来た」

固まる2人。

「連合艦隊長官」「山本五十六！？」

2人は驚いた。外見からは全く想像できない役職だ。無理もないが…「すいません！龍児が変なこと言って」

華音が謝る。学校にきた保護者みたいだなあとか思いながら「ん？ああいいよ気にしてないから」とか言う脳天気長官山本。

「それで、その特殊任務ってのはね」

五十六は動揺する2人を無視して話を進める。

「まあ簡単に言うと、戦車に乗ってほしいなーっていう話なんだ」サラッととんでもないことをいった。

「戦車ってあの陸軍や海兵隊のですか？」

「うん」

うんじゃねえよ。

2人はここで以心伝心した。

「まあついて来てくれるかい？町にでるからさ」
「いわれるがままに付いていく2人。」

エリスのいる工場――

扉が開いて3人の人が入ってきた。1人は知っている、確か山本さんだ後の2人は例の戦車乗りだろうか。

戦車長と射手と装填手が初めて出会った瞬間だった。

p
a
r
t
3
へ
続
く

龍殺しの兵器part2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
感想、意見、待っています。

龍殺しの兵器part3 (前書き)

龍殺しの兵器いよいよ戦場へ！
でも……まだ戦いません（・ω・）

龍殺しの兵器 part 3

「でかい…」

「大きいです…」

龍児て華音はこれまで見たこともない戦車を見て呆氣にとられていた。彼らの注目を浴びているのは戦車全体よりもその巨大な大砲だった。無理もない、今まで75?程度の砲しか見たことがない2人にとって120?の大砲は正にヤック・デカルチャーなわけである。「で、乗ってくれんのか?この戦車に」

立ち尽くす2人に親方が聞く。

答えは直ぐに返ってきた。

「乗ります!!」

息のそろった2人の声が工場内に響く。エリスはその余韻に浸りながら2人を見つめた。

「よろしくね!2人とも」

そう言ってエリスは龍児たちと握手を交わす。そんな3人を山本と親方は少し離れたところから眺めていることにした。

「お前、見る目あるじゃねえか」親方が山本に言う。

「あ、いえそんな事は無いです。自分は彼らの才能を見抜いたんじゃないかなんかこう…熱意みたいなものがあの2人に見えたから…」山本は照れくさそうに笑いながら答えた。

「熱意ねえ…お前もそんな事を言うようになったか…あの現実主義者がねえ」

「ははっ、現実だけを見ていたら村田さんの造ったあの戦車は見えなかったと思います。夢みたいな兵器ですからね。」

「夢ねえ…俺もそいつが見たかったのかもな。戦車造ってそれが龍を蹴散らす…そんなガキみたいな夢を」しばし談笑をする2人。辺りは真っ暗闇のこの町外れ。その中に一つ、だけどとても大きくて綺麗な光が輝いていた。

翌日――

「で、これが砲弾だ」

朝早くからエリスたちのいる工場は少しばかり賑やかだった。実際の所、親方に朝早くに叩き起こされてしぶしぶ集合したわけだ。ただ1人、山本五十六を除き：奴は寝ている。

「でか！てか重！！」

渡された砲弾を持った龍児がその初めての存在感に思わず声を漏らす。無理もない彼が普段扱っていたのは75？砲の砲弾、今持たされた120？砲の砲弾、大きさも重さも倍ある代物だ。

「うーん：親方、もしこの砲弾が効かなかったら：大きさはかえって弱点だよな？」

突然発言したのはエリスだった。だが誰もその発言の意味を理解できない。

「重さは装填の手間、装填の手間は連射性能の低下：そこが問題なんだろ？エリス」

あくび混じりの声。今更起きてきた山本がエリスの発言に補足を加える。

「つまり、何だ？」

親方はエリスに聞く。

「同じ“豆鉄砲”なら連射が効くほうがいい：」エリスは少しうつむき加減でいった。あまり言いたいことではなかったからだ。だが、言いたい言いたくない関係なしに現実はそのびえ立っている。可能性を知らないよりは覚悟していたほうがいい：エリスはそう考えた。

エリスの言っていることは一理ある。実際、玩具の鉄砲を小さい子が人に向けて撃ったとき、撃たれた側が死ぬなんてことはまずない。ただ何百発も連射されるとウザイ。それと同じだ、120？の砲が効かないとわかったとき、その時75？と120？にあった区別は龍にとっては皆無となる。その可能性はゼロではないのだ。

「君は龍が怖いのかい？」

山本はうつむくエリスに近寄る。

「はい：龍は全てを奪ったから：全てを壊したから：また壊されちゃうと思ったら私：不安で：」

薄汚れた工場の床にエリスの瞳から溢れ出す液体が滴り落ちる。エリスにとって大切なものを持つほど不安なことはなかった。昨日仲間になったばかりの龍児や華音だってエリスにとっては大切な仲間だ。知り合ってどれくらいなんてエリスには関係ない、今までよりもこれから：独りぼっちだったエリスは親方に引き取られるまで、人と触れ合えなかった。失うのが恐いから：

「いいかいエリス、俺達は今ここにいる、一緒にな。そしてこれからもずっと一緒なんだ。分かるかい？」

山本は泣きじゃくるエリスの頭にぽんと手をおくとそのまま優しくなでた。

たった5分足らずの出来事だったがエリスにはとても長く感じた。

「なんだあしんきくせえなあおい！！」

最初に沈黙を破ったのは親方、続いて龍児が「いやあ、会ってまだ1日もたってないのにおうげさだよなあ」とかいいながら親方に続く。

「いやー、参ったな：私この手の空気はちょっとねえ：エリスちゃんとりあえず元気だしてよ。私たちは仲間なんだから、いなくなったりしないよ？」

華音がエリスを慰める。最初の一言が余計なのはあえてノータッチでいく。

「ほらエリス、みんな心配しているぞ。おまえが泣いていたら始まらないんだ、“戦車長”」

「すいません、山本さん。あとみんなも：そうだよ、悩んでも仕方がない。今は信じて戦う時なんだよね：うん」

それからエリスたちは訓練に励んだ。古龍を倒すために：いや、仲

間を守るために。

ところでの話だが戦車はの操縦は今の所不要らしい。海でどう戦うかと聞かれて山本が考えた作戦に理由があるのだが、単純に今回の作戦では戦車の砲撃力を主として使うため動かないそうだ。要は固定式砲台になれというわけだが…親方はそのせいで機嫌が悪い。実際どうするかは「ごくひだよ」だそうだ。不安だったがとりあえず信じることにした。

1ヶ月が経った。空は1ヶ月前と変わりなく青い。だがいつも空よりも青い海は連合艦隊の所属艦によって埋め尽くされていた。遂に古龍が来るのだ。艦隊は龍到着予定の海域に5日前から展開し、その時を待っていた。もちろんエリスたちの乗る戦車も混じっている。…ところでそのエリスたちだが・・・

「まさか、戦艦の砲塔を取り払って戦車を載つけるとわね…山本さんらしくど。」

エリスは苦笑いしながら潮風に浸る。

「あの野郎戦車をなんだと思ってやがる…」

親方が後方に居るであろう山本に愚痴をこぼす。

「まあまあ、今はこれしか方法が無いんですから、ね？」

華音が親方をなだめるがあんまり効果は見られない。頑固だから…

「にしても…のどかだな…これから龍と戦うって時なのに。潮風も変わらない。」

龍児が呟く。嵐の前の静けさというが今はそんな感じではない。平穏をそのまま映し出す世界は嵐を感じさせることはない。ただ時間だけが過ぎていく。

「あれ？親方、何それ？」

いくつかの大きめな圧力鍋のような物を戦車の後部に取り付ける親方。

「ん？ああ、まあいざというときのためだ。」

「ふーん…ん？何か聞こえる…」

エリスは潮風に乗ってくる聴いたことのない音を聞いた。それは力強く、乱暴な音。全てを飲み込みそうな音。

「これって、まさか」

龍児も気付いた。続けて華音も…。

「親方、これって…」

「ああ、来るぞ」

次話に続く

龍殺しの兵器part3 (後書き)

読んで頂きありがとうございます。
感想、評価待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2365r/>

Dragon killer～龍を狩るもの

2011年10月7日16時07分発行